

人をつなぐ 心をつなぐ

町のため、みんなのため。心をつなぐ活動をしている人を紹介する連載です。



映画を入りに 誰もが互いを 認め合える社会に

日本初のユニバーサルシアターを開設した 平塚千穂子さん

●「シネマ・チュプキ・タバタ」代表



ひらつか・ちほこ/昭和47年東京生まれ。早稲田大学教育学部卒業。平成13年、ボランティア団体「City Lights (シティ・ライツ)」を設立し、障害者の映画鑑賞をサポートする活動を展開。28年、日本初のユニバーサルシアター「Cinema Chupki TABATA (シネマ・チュプキ・タバタ)」をオープン。NHK障害福祉優秀賞受賞。http://chupki.jpn.org/

んでもらう企画を思いつき、当事者から話を聞くことにしたのです。

「実際に会って話してみると、積極的に明るい人ばかり。勝手に抱いていた障害者のイメージが払拭されました」

そして、「これまでは諦めていたけど、映画館に行つて映画を見た」という人たちが想像以上に多いことに気づきます。場面設定や登場人物の動きなどを説明する音声ガイドがあれば、彼らも映画を楽しめますが、当時の日本にはほとんど普及していませんでした。そこでボランティア団体「シティ・ライツ」を立ち上げ、音声ガイドの研究・制作を開始しました。

「最初の頃は、皆さんに同行し、映像に合わせて耳元でゴソゴソとガイドする鑑賞会を開いていました。間違えることもあったのに、臨場感、一体感が味わえて楽しかったと好評でした。それまでは、観客がどつと笑つていても、『何で笑っているんだろ?』と疑問だったのが、『ゴソゴソ解説のおかげで、一緒に笑え、うれしかったというのです。何として

誰もが安心して 一緒に楽しめる映画館

東京・田端にある「シネマ・チュプキ・タバタ」は、座席数二千席の小さな映画館です。でも、他の映画館にはない大きな特徴があります。目の不自由な人のために音声ガイド用のイヤホンを座席に搭載し、耳の不自由な人のために、邦画作品でも字幕付きで上映します。移

動には車椅子スペースエリアまで段差がなく、長時間じっとしているのが難しい発達障害の人や赤ちゃん連れのお母さんたちのための親子鑑賞室もあります。つまり、ここは日本で唯一の「バリアフリー映画館」、ユニバーサルシアターなのです。

「誰もが安心して一緒に映画を楽しめる映画館にしたかった」と話すのは、代表の平塚千穂子さん。「劇場名のチュプキは、アイヌ語で

『自然の光』を意味します。ここに集う人たちのありのままを、お互いに認め合える場所にしたいという思いを込めました」

平塚さんがユニバーサルシアターを作ろうと考えたのは、十七年ほど前に目の不自由な人と出会ったことがきっかけでした。当時、都内の名画座で働いていた平塚さんは、目の不自由な人たちに、チャップリンのサイレント映画『街の灯』を楽し

ももっと多くの方に楽しんでもらいたいと思いました」

接する機会が増えれば 周りも変わる

鑑賞会の参加者は増え続け、オリジナルの音声ガイドを制作して、映画祭や定期上映会を開くなど、活動の輪はどんどん広がっていきました。しかし、上映できる場所がなかなか見つかりません。ならば「どんな人でも映画を楽しめる常設の映画館を自分たちで作ろう」と決意した平塚さん。クラウドファンディングなどで寄付を募り、資

金を調達。そして平成二十八年九月、念願だった映画館をオープンすることができたのです。

「ここで初めて盲導犬を見た少女が、『私も何か役に立ちたい』と、母娘でボランティアに参加してくれたり、アニメの声優さん目当てで訪れた若者が、音声ガイドを体験して、ハンディを持つ人の立場を理解しようと努力したり。普段は接することのない人たちがここで出会いは通して、化学反応のようなことが起きるのがうれしい」と、平塚さんは話します。

映画館のある商店街にも思いや

りの輪が広がっています。

「障害のある方への接客を学ぶ勉強会をしたい」と相談を受けたり、商店街の入り口にある信号機にメロディーがついたり、通りすがりの人が同伴して駅まで案内してくれたり……。実際に接する機会が増えることで、人も街も変わっていくんです。映画は心で見えるもの。目や耳が不自由でも、ワクワクする心は同じ。感動を共有し合える場にしていきたいですね」と平塚さん。今日も、たくさんの方に映画を楽しんでもらうため、さまざまな企画を考えています。

平塚さんのある日



どんな人もくつろいで映画を楽しめるシアター内。お客さまを案内すると、誰もがその快適さに驚きます。



明るい雰囲気のあるロビーはカフェのよう。上映作品やイベントのチラシを整理中。



ロビーを飾る「チュプキの木」には、支援者たちの名前が書かれた葉っぱが生い茂っています。ここでお客さまを迎えます。

「実践倫理」とは

実践倫理は、「明るく仕合わせな生活」を実現するための、誰にでもたどることができる最も確実な「すじ道」です。端的に言えば、家庭愛和を実現していくための「すじ道」です。

戦後、年を追うごとに、私たちの社会は衣食住にも事欠く社会から物であふれる社会へと、大きな変貌を遂げました。しかし、社会がいかに変わろうとも、人々が変わることなく望んだものは、やはり明るく仕合わせな家庭の実現でした。

明るく仕合わせな家庭。それは、家族一人ひとりが互いに感謝しながら、それぞれの役割を果たすことで築かれます。自分一人だけが、他者の犠牲の上に仕合わせを築くことはできません。家族の一人ひとりが倫理に則った実践をし、その喜びを知ること、家庭愛和「我も人も仕合わせ」が実現していくのです。

言い換えれば、自分が倫理の実践を喜びとすることで、周囲の人々の仕合わせが実現し、それによって自分もより仕合わせになるということです。そしてそれは、家庭ばかりでなく、人間社会のすべてに通じる真理なのです。それゆえ仕合わせとは、「我も人も仕合わせ」を実現しようとする「実践そのもの」のうちにあると言えるでしょう。

人間にとつての仕合わせを、このように定義づける実践倫理は、生活が多様化し、個人主義が蔓延する現代社会にあっても、変わらない普遍的価値観なのです。

愛あいわ和

No. 125 2018夏号

特集

共生の時代を生きる

「コミュ力」を高めよう

魚住りえさん / 大日向雅美さん / 平田オリザさん